

学習の流れの例

- 1 ガイドに載っている危険について確認する
- 2 地震発生時、各番号付近にいた場合どうすればよいか考える
- 3 自分たちの通学路と照らし合わせて見る
 - はまっ子防災MAPを使い、通学路以外に安全なルートがないかを考える。

学習後の生徒の姿

知識・技能

外で地震にあったとき状況に応じて適切な行動があることを理解している

学校にいるときに起こる地震とは違い、外にいるときに地震が起こった場合、避難の指示を出してくれる先生はいない。したがって、自分で適切な判断ができるようになっておくことが大切だと気付かせたい。

一章 - 5 地震

家の外に潜む危険と備え

※イラストはさまざまな危険をイメージしたものです。

大きな地震が起こると、多くの建物が倒壊し、火災のおそれもあります。海沿いの地域では津波、山沿いの地域では土砂災害のおそれがあります。

めあて 外で地震にあったときの適切な行動を理解する。

うん！
外には危険がたくさんありそう。

12

13

1 火災
ひとたが火に囲まれると、避難はむずかしくなる。煙や炎を見つけたら、風下をさけて、広い道路や空き地へ避難する。

2 ブロック塀の倒壊
ブロック塀は、揺れに弱く倒壊の危険がある。揺れを感じたら、すぐにブロック塀から離れる。

3 地すべり
地震で地盤がゆるみ、地すべりが起こることがある。斜面やがけからは、すぐに離れる。

4 地割れ
自転車では、ハンドルをとられたり、歩行時には転倒するおそれがあるため近づかない。

5 橋の損傷
白旗から橋を使わないルートも調べておく。落下の危険があるため、橋の上からはすぐに避難する。

6 川の逆流
津波は河川をさかのぼるため、揺れを感じたらすぐに河川から離れ、高台などの安全な場所に避難する。

7 津波
沿岸の地域は、津波に備えて避難場所と避難経路を日頃から調べておく。揺れを感じたら、高台などに避難する。

8 切れた電線
垂れ下がった電線には近づかない。高圧線がむき出しになり、感電による大やけどの危険がある。

9 液状化
液状化が生じると、水や砂を噴き上げたリ、マンホールが浮き出したりする。状態が不安定なため近づかない。

10 電車の脱線
脱線した車両には近づかない。線路脇には高圧電線が設置されていて、感電のおそれがある。

11 頭上の注意（落下物）
ガラスや看板などの落下物に注意。手荷物などで頭を守り、広場などへ移動する。電柱などの転倒物にも注意。

12 足元の注意（飛散物）
ガラスや釘などが飛散している地面を歩かない。避難する際は足元にも注意する。

p.20-21参照

①正しく施工されたブロック塀は安全と言われているが、基準に満たないブロック塀は倒壊の可能性がある。外から見ただけではどのブロック塀が安全でどれが危険かはわからない。したがって、揺れを感じたらブロック塀から離れると認識しておくことを推奨する。

※参照：一般社団法人全国建設コンクリートブロック工業会
「ブロック塀大事典」

②落石に注意する。地震が収まった後、時間を置いて崩れる場合もある。

※参照：駿河大学
「がけ崩れや地割れが発生したら」

③耐震補強が完了していない橋は、落橋や倒壊の危険がある。

※参照：駿河大学
「がけ崩れや地割れが発生したら」

p.22-23参照

②電線に木やアンテナ、ビニールハウス、看板などの飛来物が触れている場合も危険なので触らない。

※参照：中部電力パワーグリッド
「災害時の注意点 地震のときは」

①電車に乗っているときに地震が来たら、各社で異なるが、電車は地震を感知して震度5程度で止まり、安全点検が終わるまで動かない。復旧にかなりの時間がかかると予想される。乗客は最寄の駅で降りることも考えられる。見ず知らずの駅で降りることになるかもしれない。

※参照：内閣府防災情報
「特集「もしも」のために今、できること」

このページでは、いつも何気なく通っている道にどのような危険が潜んでいるのか、改めて考えてみることで、生徒の危機意識を高めさせたい。

安全なルートを考えることで、地震発生時に危険な場所を避けることがないよう導きたい。

他の生徒たちと避難経路を共有する時間を設け、自分では気付かない視点を得られるようにしたい。

p.22-23参照

p.5参照

文字の色について

赤文字：単語の意味の説明
青文字：生徒への支援の視点や発展的な内容